

Contents

〔宝仙学園の文化〕 富田道生理事長インタビュー 創立の原点に立ち戻り、 その先を見つめる。

- リレーコラム 宝仙学園の教育 こども教育宝仙大学学長 太田誠一 □ Hosen Voice □ Hosen News
□建学の精神を訪ねて □ Hosen Schedule □ Hosen Gallery □ Hosen Archives



HOSEN GAKUEN
宝仙学園



《大学1号館の景色—太田学長、石川学部長と学生たち—》

■宝仙学園の教育

人生100年時代を豊かに生きる
深みのある教養を身に付けてほしい。こども教育宝仙大学学長
太田 誠一

必要とされるやりがいのある仕事に

2017年7月から本学園で働かせていただいています。前職は損害保険会社で40年間ほど勤め、経営にも携わって参りました。私が会社生活を歩んできたのは、昭和から平成にかけてのこと。右肩上がりやで経済が伸びていく時代から、バブルがはじけて不況となり、失われた20年と言われた時代も経験いたしました。競争が激しい実業界で、さまざまな状況を乗り越えてきました。

高校から社会人までラグビーをやっていました。身体は大きいとは言えないので、意外に思われる方も多いのですが、大学と社会人では主将も務めました。教職免許も持っておりまして、高校のラグビー部の顧問になって「花園」に行くのも一つの夢でした。今は、本年9月から日本で開催されるラグビーワールドカップを心待ちにしています。開幕から決勝まで、9試合を観戦する予定です。

そんな私が大学というフィールドを与えられ、教育分野に携わることになったのですが、大変いいご縁をいただいたと思っています。前職退職時に先輩から、「会社で現代に十分貢献した。大学で若い人を育て、今度は将来に貢献して欲しい」と言われたことが印象に残っています。

保育分野に目を向けてみますと、共働きのあたり前となってきていますから、保育者が子育てをバックアップする場面は多くなり、ますます有意義な仕事となるに違いありません。平成から令和に元号が変わり、まさに世の中は変わり目を迎えていると感じています。AIやロボットの普及により、中間的な事務仕事は淘汰され、残っていくのは、より高度な仕事か、人を思いやる仕事、あるいは、複雑な動きを求められる体を使った労働であるとされています。そのなかで、ホスピタリティマインドやクリエイティブな表現能力を求められる保育士は、人にしか任せられない仕事として、これからの時代にも必要とされる職業と考えられています。

4年間で、生きる指針となる学びを

今、本学では大学改革を進めています。一昨年度、私が着任し、まもなくワーキンググループを立ち上げ、また、推進本部を設置し、新たな教育プロジェクト「こども教育HOSEN WAY」を動かし始めました。一方、大学に対して「教育の内部質保証」を求める動きがありました。「内部質保証」とは聞き慣れない言葉ですが、「教育研究活動や学生の学修成果といった各大学の社会的役割を明らかにし、継続的に保証する体制を整えよ」ということです。「こども教育HOSEN WAY」では、約40項目におよぶプロジェクトを推進し、「教育の内部質保証」とも合致した取り組みとなっています。

本学の特長として、4年制の保育単科大学であることがあげられます。4年間ですから、保育園や幼稚園での実習に多くの時間を割くことができ、ゆとりを持って保育の基礎を積み上げることができます。また、これは開学以来の本学の伝統でもあるのですが、造形や音楽、演劇、身体遊びといった表現教育が大変充実しています。さらには、食育おやつや身体遊び、異文化・国際理解など、各学生が能力を磨きたいと考える分野を深く学ぶ「宝仙マイスター制度」も展開しています。

こうして見ていきますと、短大・専門学校の2年間では時間が足りないと感じます。保育士は子育てをサポートする大切な仕事ですし、AI時代になれば、専門職として今以上に高度な役割を求められることになるでしょう。高校女子部との高大接続の進展は、その辺りを視野に入れての動きでもあるのです。これから人生100年になると言われ、複数の職業を経験することが普通になる時代が来るかもしれません。学生の皆さんには、まずは保育をしっかりと学び、そして、音楽でも造形でもダンスでも、興味のあることは学び続けていただきたい。多様な学びの中で、深みのある教養を身につけ、品格と知性を磨き、豊かな人生を歩んで欲しいと願っています。